鎌倉初期書写色葉字類抄の音注

二戸　麻砂彦

A Study of Phonetic Glosses in “Iroha-jiruisyō” reproduced in the first period of Kamakura

NITO Masahiko

Abstract

Japanese Dictionaries in Heian period has been inflected by Chinese Dictionaries. These are divided into three classes, Bushu（部首：parts of Kanji), Igi（意義：meanings of Kanji) and Jion（字音：readings of of Kanji) from the point of view about there search systems. These search systems were not fit for Japanese Language. And so, Dictionaries by the use of Iroha（イロハ）search system were composed in late Heian period. “Iroha-jiruisyō” is one of them. This study analyzes Phonetic Glosses in “Iroha-jiruisyō” reproduced in the first period of Kamakura.

キーワード：色葉字類抄、原形本、日本漢字音
Key Word : Iroha-jiruisyō, Original Edition, Sino-Japanese

0　はじめに
1　鎌倉初期書写色葉字類抄の位置付け
2　鎌倉初期書写色葉字類抄の翻刻
3　鎌倉初期書写色葉字類抄の音注
4　掲出字の増補と音注
5　おわりに

0　はじめに

鎌倉初期書写色葉字類抄は零帖ながら色葉字類抄の原初形態を示した文献として、その複製が公刊された。(1) その後、原形本という名称を冠して言及されることもあるが、果たして色葉字類抄の原撰本系諸本に関わるものであるかどうか、不明である。本稿では、音注を中心に分析を加え、この問題に取り組む。

山梨県立大学　国際政策学部　国際コミュニケーション学科

1　鎌倉初期書写色葉字類抄の位置付け

鎌倉初期書写色葉字類抄の書誌については、すでに川瀬一馬『古辞書の研究』[2]において概略的な言及がある。同書写本が世に知られるようになった経緯は、その跋に同氏の識語（昭丁巳＝昭和五十二年）が加えられ、そこに詳しい。長い引用にはなるが、入手の経緯や公刊に至る状況を知ることができるので、以下に掲げる。

昭和十五年秋唐招提寺長老北川智海律師、予が古辞書研究の爲本帖を恵与せらる。こは零葉なるも鎌倉初期を降らざる書寫にして、古辞書の研究中に考究せし如く、色葉字類抄の原型を示せる資料たるべし。予昭和極初より古辞書の研究に心を寄せ、戦時中の困難を排して之を纏め学位請求論文となす。又その後機会ありて古辞書叢刊の業に関与し、更にここ十七年来、同志に協力して我が日本民族に最も必要なる大辞典編纂に従ひつゝありて、愈々両三年中には完成の見込となれり。右三様の営み完成の上は記念の爲本帖を私家版として覆製印行し関係方面に贈呈せんと企図しゐたりしが、今回古辞書叢刊も一応完遂せるを以て、雄松堂書店新田氏の慫慂もあり、之を玻璃版に附することとせり。昭丁巳吉辰　川瀬一馬識

さて、世俗字類抄や色葉字類抄など字類抄諸本[3]（単に字類抄と称する文献はないが、節用文字などをも含む諸本の総称として用いる）は、平安時代末期において常用する基本的な語彙としての和名を塊集し、対応する漢字見出しのもとに掲出字を選択していく、という編纂の原則を持って成立した。いわゆる「色葉和名」とも言える体裁である。[4]この「色葉和名」は原撰本系諸本と想定できる初期段階の書名にもなっていたらしい。まず和名をもって塊集をするとなれば、その分類体裁としてイロハ順の検索が採用されたのは自然な成り行きと言える。また、これら当時の辞書は漢文の訓読や作成において活用が期待されたであろうから、和訓だけではなく、掲出字の字音を求める場面もあったはずである。増補改編が進む中、この要請には反切・同音字注・仮名音注を付載することで対応した。字音注記としては字類抄諸本に限らない一般的な方法と認められる。このことから、字類抄諸本の編纂過程は概ね次の二段階を想定できる。

A　いわゆる「色葉和名」の基準に基づく和訓語彙の塊集
（分類体裁としてイロハ順の検索を採用した初期段階）

B　語彙数の増加と字音の付載
（利便性の向上を目指した増補改訂段階）

当該の鎌倉初期書写本はAの段階に相当すると認められる。書写当時の書き入れ、あるいは増補なども否定できないが、見出し語たる掲出字の数量や意義分類の状況などから見て、原初的な姿を彷彿とさせる。

しかし、字類抄諸本の系統関係は、いまだ不明の点が多い。世俗字類抄の場合、二巻本が七巻本より前に編纂されたものであること、その内容からも首肯できるが、色葉字類抄諸本との関係が明らかとは言えない。二巻本色葉字類抄[5]の奥書によれば、根本書たる二巻本の「色葉和名」をもとにして、四巻構成の書本「橘先生之本」は校訂されたようである。これをさらに細分化して、八巻の構成としたのが奥書作者であろう。この二巻本「色葉和名」自体が原形本に該当するのか、あるいは、当該の鎌倉初期書写本を原形と見立てるべきか、判然とはしない。直截的な親本とは断定し得ないが、改訂を経た四巻本の「橘先生之本」が色葉字類抄諸本の基盤になったことは想像できる。二巻本の色葉字類抄が上上・上下・下上・下下という四巻構成であることが示唆的であろう。該当箇所を掲げる。

【二巻本色葉字類抄の奥書】

○傳二借橘先生之本一、彼人於二本色葉和名一更加二功労一加二文字一、正声無レ極勝本也、…（巻上上・四九オ二～三）

○自二天養比一至二于長寛一廿余年、補綴无レ隙、抑部類如レ舊更加二星點一、紕繆雖レ多愚昧難レ直、學者毎レ見、可二摺改一之、誂貢士入道詞字少〻加二朱點一、為レ要二文不迷一也、傳二借橘先生之本一、為二書本一而已、…根本書者、上下両巻也、橘先生本開為二四帖一、今又開為二八帖一而已、…（巻上下・五三ウ三～七）

ここで、先行の研究成果[6]を勘案しながら、先の二段階を具体化し、諸本における字音の付載を整理しておきたい。

『原撰本』系諸本の段階（A）

和名という基準で常用語の塊集を目指したため、原則的に字音の把握を具体化する音注等はなかったか、あるいはかなり限定的だったと推測する。ただし、原形そのものは不明である。

『世俗字類抄』編纂の段階（B1）

常用語の範囲を拡大しつつ、字類抄の基盤を確立する改訂がなされた。その過程で、初学的な漢文の訓読や作成に資する音注が限定的に付載された。反切の数は少なく、主に『切韻』『玉篇』などを引用する先行文献によるものと考えられる。

『色葉字類抄』編纂の段階（B2）

辞書利用の利便性を高めるために、掲出語数を格段に増加させ、意義分類の整備や見直しをも図っていった。高度な漢詩文の作成や運用も考慮され、その一環として、相当数の反切が付載された。基本的に『世俗字類抄』改訂段階での反切は継承せず、新たに『切韻系韻書』のそれを転載した。ただし、人事・辞字両部では付則的に『玉篇』の反切をも添加している。

原形本を含む原初段階を推定して『原撰本』系諸本と呼び、鎌倉初期書写本はここに所属するとしておく。この段階で音注表示はなかったか、あるいはかなり限定的だったと推測したが、これは、すでに定着していた字音語や字音以外に読みのない語も見出し選択しているからである。その場合、すべてに音注を付けないこともあり得るが、掲出字の理解に必要と判断した限定的な場合には、何らかの音注を付載したかもしれない。あるいは、世俗字類抄の成立初期に音注が加えられた可能性もある。右の結果を踏まえて、その候補の一つとなる音注が二巻本世俗字類抄に見出せる「如音」[6]ではないかと想定される。

2　鎌倉初期書写色葉字類抄の翻刻

音注の分析をするに際しては、和訓との連関を視野に入れつつ進めなければならない。すでに述べたごとく、いわゆる「色葉和名」を標榜して編纂された経緯を忘れてはならないからである。そこでまず鎌倉初期書写色葉字類抄の翻刻を【表1】〜【表5】に掲げ、同書写本の全体を一覧できるようにした。表の構成を示しておく。

番号　→　残簡十帖に存する語それぞれに通し番号を付した。
掲出字　→　見出し語。単字と熟字（二字以上）がある。
＊　JIS外漢字は「部首＋諧声符」のように表示した。(7)
右注または右傍　→　割注の右を右注、掲出字の右側を右傍と略す。
左注または左傍　→　割注の左を左注、掲出字の左側を左傍と略す。
所在　→　篇・部・帖数（現存部分の通し）・表裏・行数の順。
＊　篇はイロハ順、部は意義分類を指す。

ここで具体的な例を主として知篇から適宜掲げる。

単字の場合、和訓を左注に、字音を右注に配するのを原則とする。いずれか片方の場合、あるいは両方とも付されないこともある。和訓・字音いずれも仮名による。仮名による字音表記、つまりは仮名音注である。反切や同音字注はない。また、掲出字に朱声点を差すことが多い。

〔007〕血［入声］　クエツ　（知・人躰01ウ2）
〔019〕茅［平声濁］　チハウ　（知・植物02オ3）
〔004〕父［上声］　チチ　（知・人倫01オ3）
〔059〕智［入声］　チ　（知・詞字03ウ2）

塾字の場合、配置上その下に余白が取れないため、和訓・字音ともに掲出字の右側（右傍）に配するのを原則とするが、掲出字の両側（右傍と左傍）に付すことも随時ある。稀に左側（左傍）に付される場合があるのは、右傍に余白が確保できない時の処置である。単字と同じく、和訓・字音いずれも仮名による。また、掲出字に朱声点を差すことがある。

〔005〕烏獲［上字入声］　チカラヒト［右傍］　（知・人倫01オ3）
〔036〕鍮石［平声去声］　チウシヤク［右傍］　（知・雑物02ウ4）
〔078〕惆帳　チウイタム心也［右傍］［左傍］　（知・詞字03ウ7）
〔105〕林檎　リムコウ［左傍］　（利・植物05オ1）

いわゆる「色葉和名」の指標に従って大分類を施し、次にイロハ各篇を意義分類によって下位区分する方法は、いずれの字類抄諸本にも共通する。ただし、和訓に対してのみイロハ順を適用するわけではなく、字音語についても実施する。特に詞字に属する熟字群は、その傾向が強い。当該の鎌倉初期書写本は〔知篇〕（冒頭の地儀が一部欠落）〔利篇〕〔奴篇〕〔留篇〕〔遠篇〕（雑物の中途まで）という零帖である。日本語の音節構造に関する特徴から考えても、ラ行に所属する〔利篇〕〔留篇〕は字音語しかあり得ず、必ずしも語彙量の豊富な部ばかりではないが、その構成をほぼ窺うことはできる。次章以下、残存する各篇ごとに、和訓との関係を視野に入れながら、仮名音注として付載された字音の実態を分析しよう。

【表1／1】

【知篇】				
番号	掲 出 字	右注または右傍	左注または左傍	所　在
001	馳道	チタウ（右傍）	天子所行之道也（割注）	知・地儀01オ1
002	兒（平声濁）	シ（右注）	チコ（左注）	知・人倫01オ3
003	嫡（入声）	チヤク（右注）		知・人倫01オ3
004	父（上声）		チヽ（左注）	知・人倫01オ3
005	烏獲（上字入声）	チカラヒト（右傍）		知・人倫01オ4
006	娜嬢	チヽハヽ（右傍）		知・人倫01オ4
007	血（入声）	クヱツ（右注）	チ（左注）	知・人躰01ウ2
008	脉（入声）	ハク（右注）	チノミチ（左注）	知・人躰01ウ2
009	乳（上声）	シユ（右注）	チ（左注）	知・人躰01ウ2
010	力	リヨク（右注）	チカラ（左注）	知・人躰01ウ2
011	痔	チ（右注）	チノヤマヒ（左注）	知・人躰01ウ2
012	妳房	チフサ（右傍）		知・人躰01ウ3
013	乳<u>广＋付</u>	チフ（右傍）		知・人躰01ウ3
014	乳癰	同（右傍）		知・人躰01ウ3
015	鴆（去声）	チム（右注）	以羽入酒飲人死（左傍）	知・動物01ウ5
016	鱐（平声）	ヨウ（右注）	チヽカフリ（左注）	知・動物01ウ5
017	千鳥	チトリ（右傍）		知・動物02オ1
018	乳牛	チウシ（右傍）		知・動物02オ1
019	茅（平声濁）	ハウ（右注）	チ（左注）	知・植物02オ3
020	苣（上声）	キヨ（右注）	チサ（左注）	知・植物02オ3
021	茶（平声）		チヤ（左注）	知・植物02オ3
022	萵苣		チサ（左注）	知・植物02オ4
023	石髪		チヒサキコケ（左注）	知・植物02オ4
024	篪（平声）	チ（右注）		知・雑物02ウ1
025	徴（上声）	チ（右注）		知・雑物02ウ1
026	碪（上声）	チム（右注）		知・雑物02ウ1
027	快（上声）	チヒ（右注）		知・雑物02ウ1
028	筑（入声）	チク（右注）		知・雑物02ウ1
029	注		チウ（左注）	知・雑物02ウ2
030	註（去声）		同（左注）	知・雑物02ウ2
031	軸（入声）	チク（右注）	書軸（左注）	知・雑物02ウ2
032	褌（入声）	ヒツ（右注）	チハヤ（左注）	知・雑物02ウ2

【表1／2】

【知篇】				
番号	掲 出 字	右注または右傍	左注または左傍	所　在
033	賃（去声）	チム（右注）		知・雑物02ウ2
034	幗（入声）	コク（右注）		知・雑物02ウ3
035	逆靼	チカラカハ（右傍）		知・雑物02ウ4
036	鍮石	チウシヤク（右傍）		知・雑物02ウ4
037	地子	チシ（右傍）		知・雑物02ウ4
038	茶椀	チヤワン（右傍）		知・雑物02ウ4
039	襷褌	チハヤ（右傍）		知・雑物02ウ4
040	粽	ソウ（右注）	チマキ（左注）	知・飲食02ウ6
041	糉	ソウ（右注）	同（左注）	知・飲食02ウ6
042	角黍	チマキ（右傍）		知・飲食03オ1
043	千（平声）			知・員數03オ3
044	丈（上声）			知・員數03オ3
045	小（上声）	セウ（右注）	チヒサシ（左注）	知・員數03オ3
046	契（去声）	ケイ（右注）	チキリ（左注）	知・詞字03オ5
047	力（入声）			知・詞字03オ5
048	勅（入声）			知・詞字03オ5
049	忠（平声）			知・詞字03オ5
050	隣（平声）	リム（右注）	チカシ（左注）	知・詞字03オ5
051	周	シウ（右注）	同（左注）	知・詞字03ウ1
052	迩	シ（右注）	同（左注）	知・詞字03ウ1
053	親	シム（右注）	チカ（左注）	知・詞字03ウ1
054	幾	キ（右注）	チカシ（左注）	知・詞字03ウ1
055	近	キム（右注）	同（左注）	知・詞字03ウ1
056	促（入声）	ソク（右注）	チカツク（左注）	知・詞字03ウ2
057	散	サム（右注）	チラス（左注）	知・詞字03ウ2
058	鏤（去声）	ロウ（右注）	チリハム（左注）	知・詞字03ウ2
059	智（去声）	チ（右注）		知・詞字03ウ2
060	誓（去声）	セイ（右注）	チカイ（左注）	知・詞字03ウ2
061	盟		同（左注）	知・詞字03ウ3
062	賃			知・詞字03ウ3
063	寵（上声）	チヨウ（右注）		知・詞字03ウ3
064	贔眉	チカラヲコシ（右傍）		知・詞字03ウ4
065	帳望（平声去声）	チヤウハウ（右傍）		知・詞字03ウ5
066	遅別	チイン（右傍）		知・詞字03ウ5
067	抽賞	チウシヤウ（右傍）		知・詞字03ウ5

【表1／3】

【知篇】				
番号	掲 出 字	右注または右傍	左注または左傍	所　在
068	知音	チイン（右傍）		知・詞字03ウ5
069	知己	チコ（右傍）		知・詞字03ウ5
070	勅命	チヨクメイ（右傍）		知・詞字03ウ6
071	秩滿	チヽマン（右傍）		知・詞字03ウ6
072	住持（平声上声濁）	チウシ（右傍）		知・詞字03ウ6
073	沈倫	チンリン（右傍）		知・詞字03ウ6
074	沈吟			知・詞字03ウ6
075	沈湎（下字去声）	チンメン（右傍）		知・詞字03ウ7
076	沈没	ホツ（下字右傍）		知・詞字03ウ7
077	瘕暗	チアン（右傍）		知・詞字03ウ7
078	惆帳（平声去声）	チウ（上字右傍）	イタム心也（左傍）	知・詞字03ウ7
079	逐電（下字去声）	チクテン（右傍）		知・詞字03ウ7
080	致仕	チ（上字右傍）	年老ツカヘセル也（左傍）	知・詞字04オ1
081	持齋（下字上声）	サイ（下字右傍）		知・詞字04オ1
082	珍美			知・詞字04オ1
083	蟄居（入声平声）	キヨ（下字右傍）		知・詞字04オ1
084	持疑（下字平声）	キ（下字右傍）		知・詞字04オ1
085	治方			知・詞字04オ2
086	治略	リヤク（下字右傍）		知・詞字04オ2
087	治術			知・詞字04オ2
088	張本			知・詞字04オ2
089	遅疑	キ（下字右傍）		知・詞字04オ2
090	遅鈍（下字上声濁）	トム（下字右傍）		知・詞字04オ3
091	忠貞（平声平声）	チウテイ（右傍）		知・詞字04オ3
092	眤近	チツキン（右傍）		知・詞字04オ3
093	聴聞			知・詞字04オ3
094	停止			知・詞字04オ3
095	値遇	チク（右傍）		知・詞字04オ4
096	耻辱（上声入声濁）	チンシヨク（右傍）		知・詞字04オ4
097	陳謝	シヤ（下字右傍）		知・詞字04オ4
098	寵幸	チウカウ（右傍）		知・詞字04オ4
099	寵愛			知・詞字04オ4
100	鎮護（平声平声濁）	チンコ（右傍）		知・詞字04オ5

【表2】

【利篇】				
番号	掲 出 字	右注または右傍	左注または左傍	所　在
101	吏（去声）	リ（右注）		利・人倫04ウ1
102	麟（平声）	リム（右注）		利・動物04ウ3
103	榴（平声）	リウ（右注）	シヤクロ也（左傍）	利・植物04ウ5
104	龍瞻		リムタウ（左傍）	利・植物05オ1
105	林檎		リムコウ（左傍）	利・植物05オ1
106	令法		リヤウホウ（左傍）	利・植物05オ1
107	律（入声）			利・雑物05オ3
108	兩			利・員數05オ5
109	利（上声）			利・詞字05ウ2
110	理（上声）			利・詞字05ウ2
111	領	レイ（右注）	リヤウス（左注）	利・詞字05ウ2
112	理論	ロン（下字右傍）		利・詞字05ウ2
113	理致	チ（下字右傍）		利・詞字05ウ2
114	理運			利・詞字05ウ2
115	理乱			利・詞字05ウ2
116	流冗	リウシヨウ（右傍）	人ノナカシアハツル心也（左傍）	利・詞字05ウ2
117	利口			利・詞字05ウ4
118	利益			利・詞字05ウ4
119	利潤	シユム（下字右傍）		利・詞字05ウ4
120	利害			利・詞字05ウ4
121	利見			利・詞字05ウ4
122	利鈍			利・詞字05ウ5
123	吏卓＋夸	リアム（右傍）		利・詞字05ウ5
124	領掌			利・詞字05ウ5
125	悋惜	リムセキ（右傍）		利・詞字05ウ5
126	虜掠	リヨリヤク（右傍）	トラヘカスムル心也（左傍）	利・詞字05ウ5
127	立用	リウヨウ（右傍）		利・詞字05ウ6
128	陵遲	リヨウ（上字右傍）		利・詞字05ウ6
129	凌夷	イ（下字右傍）		利・詞字05ウ6
130	諒闇	リヨウアン（右傍）	又涼陰又梁闇又亮闇（割注）	利・詞字05ウ6

【表3】

【奴篇】				
番号	掲 出 字	右注または右傍	左注または左傍	所　在
131	沼（上声）	セウ（右注）	ヌマ（左注）	奴・地儀06オ3
132	盗（去声）	タウ（右注）	ヌスヒト（左注）	奴・人倫06オ5
133	賊（入声）	ソク（右注）	同（左注）	奴・人倫06オ5
134	主（上声）			奴・人倫06オ5
135	偷兒	ヌスヒト（右傍）		奴・人倫06オ6
136	鵄（平声）	コウ（右注）	ヌエ（左注）	奴・動物06ウ2
137	白滕木	ヌテノキ（右傍）		奴・植物06ウ4
138	零陵子	ヌカコ（右注）		奴・植物06ウ4
139	布（去声）			奴・雑物07オ1
140	繡（去声）	シウ（右注）		奴・雑物07オ1
141	緯（去声）	キ（右注）	ヌキ（左注）	奴・雑物07オ1
142	糠（平声）		ヌカ（左注）	奴・飲食07オ3
143	蹐（入声）	セキ（右注）	ヌキアシ（左注）	奴・詞字07オ5
144	竊（入声）	セウ（右注）	ヌスム（左注）	奴・詞字07オ5
145	盗	タウ（右注）	同（左注）	奴・詞字07オ5
146	偷（平声）	トウ（右注）	同（左注）	奴・詞字07オ5
147	挺（上声）	テウ（右注）	ヌキツ（左注）	奴・詞字07オ5
148	擢	タク（右注）	同（左注）	奴・詞字07オ6
149	抽	チウ（右注）	同（左注）	奴・詞字07オ6
150	拔（入声）	ハツ（右注）	ヌク（左注）	奴・詞字07オ6
151	抄（去声）	セウ（右注）	同（左注）	奴・詞字07オ6
152	褫（去声）	同（左注）		奴・詞字07オ6
153	脱（入声）	タツ（右注）	ヌク（左注）	奴・詞字07ウ1
154	釋（入声）	セキ（右注）	同（左注）	奴・詞字07ウ1
155	縫（平声）	ホウ（右注）	ヌフ（左注）	奴・詞字07ウ1
156	塗（平声）	ト（右注）	ヌル（左注）	奴・詞字07ウ1
157	禘		ヌク・禘眼（左注）	奴・詞字07ウ1

【表4】

【留篇】				
番号	掲 出 字	右注または右傍	左注または左傍	所　在
158	瑠璃			留・雑物07ウ4
159	留守			留・詞字08オ1
160	流浪	ラフ（下字右傍）		留・詞字08オ1
161	流轉	ルテム（右傍）		留・詞字08オ1

【表5／1】

【遠篇】				
番号	掲 出 字	右注または右傍	左注または左傍	所　在
162	崗	カウ（右注）	ヲカ（左注）	遠・地儀08オ4
163	岳（入声）	カク（右注）	ヲカ（左注）	遠・地儀08オ4
164	丘（平声）	キウ（右注）	同（左注）	遠・地儀08オ4
165	阜（上声）	フ（右注）	同（左注）	遠・地儀08オ4
166	陵（平声）	リヨウ（右注）	同（左注）	遠・地儀08オ4
167	檻	カム（右注）	ヲハシマ（左注）	遠・地儀08オ5
168	大厦	ヲホキナルヤ（右傍）	タイカ（左傍）	遠・地儀08ウ1
169	溟渤	ヲホウミ（右傍）		遠・地儀08ウ1
170	男			遠・人倫08ウ3
171	女（上声濁）			遠・人倫08ウ3
172	舅（上声）	キウ（右注）	ヲチ（左注）	遠・人倫08ウ3
173	叔（入声）	シク（右注）	同（左注）	遠・人倫08ウ3
174	伯（入声）	ハク（右注）	同（左注）	遠・人倫08ウ3
175	夫（平声）			遠・人倫08ウ4
176	姨（平声）	イ（右注）	ヲハ（左注）	遠・人倫08ウ4
177	姑（平声）	コ（右注）	同（左注）	遠・人倫08ウ4
178	姪（入声）	テツ（右注）	ヒメ（左注）	遠・人倫08ウ4
179	甥		同（左注）	遠・人倫08ウ4
180	老（上声）			遠・人倫08ウ5
181	翁（平声）			遠・人倫08ウ5
182	叟（上声）	ソウ（右注）	同（左注）	遠・人倫08ウ5
183	耆（平声）	キ（右注）	同（左注）	遠・人倫08ウ5
184	弟（上声）			遠・人倫08ウ5
185	妹（去声）	マキ（右注）	同（左注）	遠・人倫08ウ6
186	祖（上声）	ソ（右注）	ヲホチ（左注）	遠・人倫08ウ6
187	長（上声）		ヲサ（左注）	遠・人倫08ウ6
188	胥		同（左注）	遠・人倫08ウ6
189	鬼		ヲニ（左注）	遠・人倫08ウ6
190	魔		同（左注）	遠・人倫08ウ7
191	儺（上声）	タ（右注）	ヲヒヤラヒ（左注）	遠・人倫08ウ7
192	公（平声）	コウ（右注）	ヲホヤケ（左注）	遠・人倫08ウ7
193	己（平声）	キ（右注）	ヲノレ（左注）	遠・人倫08ウ7

【表5／2】

【遠篇】				
番号	掲 出 字	右注または右傍	左注または左傍	所　在
194	祖父	ヲホチ（右傍）		遠・人倫09オ1
195	伯父	ヲチ（右傍）		遠・人倫09オ1
196	仲父	同（右傍）		遠・人倫09オ1
197	舛父	同（右傍）		遠・人倫09オ1
198	季父	同（右傍）		遠・人倫09オ1
199	伯父	同（右傍）		遠・人倫09オ2
200	曽祖父	ヲホヲホチ（右傍）		遠・人倫09オ3
201	曽祖母	ヲホヲハ（右傍）		遠・人倫09オ3
202	従祖父	ヲトヲチ（右傍）		遠・人倫09オ3
203	従祖母	ヲトヲハ（右傍）		遠・人倫09オ4
204	頤（平声）	イ（右注）	ヲトカヒ（左注）	遠・人躰09ウ1
205	頷（上声）	カン（右注）	同（左注）	遠・人躰09ウ1
206	頷（上声）	カン（右注）	同（左注）	遠・人躰09ウ1
207	拇（去声濁）	ホウ（右注）	ヲホユヒ（左注）	遠・人躰09ウ1
208	指（上声）	シ（右注）	同（左注）	遠・人躰09ウ1
209	尾（上声濁）	ヒ（右注）	ヲ（左注）	遠・人躰09ウ2
210	面（去声）	メン（右注）	ヲモテ（左注）	遠・人躰09ウ2
211	翹（平声）	ケフ（右注）	ヲフサ（左注）	遠・人躰09ウ2
212	病痤		ヲフシ（左傍）	遠・人躰09ウ3
213	齵歯		ヲソイハ（左傍）	遠・人躰09ウ3
214	鴛（平声）	ヱン（右注）	ヲシ（左注）	遠・動物09ウ5
215	鴦（平声）	アウ（右注）	同（左注）	遠・動物09ウ5
216	雄（平声）			遠・動物09ウ5
217	駑（平声）	ト（右注）	ヲソムマ（左注）	遠・動物09ウ5
218	駘	タイ（右注）	同（左注）	遠・動物09ウ5
219	牡（上声濁）	ホ（右注）	ヲ（左注）	遠・動物09ウ6
220	媒（平声濁）	ハイ（右注）	ヲトリ（左注）	遠・動物09ウ6
221	囮（平声）	イウ（右注）	同（左注）	遠・動物09ウ6
222	麋（平声濁）	ヒ（右注）	ヲホシカ（左注）	遠・動物09ウ6
223	狼（平声）	ラウ（右注）	ヲホカミ（左注）	遠・動物09ウ6
224	犲（平声）	サイ（右注）	同（左注）	遠・動物10オ1
225	嬪	ヒン（右注）	ヲウ（左注）	遠・動物10オ1
226	鱶魚	ヲコシ（右傍）		遠・動物10オ2
227	駑馬	ヲソムマ（右傍）		遠・動物10オ2

【表5／3】

【遠篇】				
番号	掲 出 字	右注または右傍	左注または左傍	所　在
228	荆（平声）	ケイ（右注）	ヲトロ（左注）	遠・植物10オ4
229	棘（入声）	キヨク（右注）	同（左注）	遠・植物10オ4
230	朮（入声）	シキツ（右注）	ヲケラ（左注）	遠・植物10オ4
231	荻（入声）	テキ（右注）	ヲキ（左注）	遠・植物10オ4
232	麻（平声）	ハ（右注）	ヲ（左注）	遠・植物10オ4
233	苧（上声）	チヨ（右注）	同（左注）	遠・植物10オ5
234	穜（平声）	トウ（右注）	ヲクテイネ（左注）	遠・植物10オ5
235	芣苡	ヲホハコ（右傍）		遠・植物10ウ1
236	莱菔	ヲホネ（右傍）	又大根（左傍）	遠・植物10ウ1
237	艹＋舄茈	ヲモタカ（右傍）		遠・植物10ウ1
238	水芒	同（右傍）		遠・植物10ウ1
239	車前草	ヲホハコ（右傍）		遠・植物10ウ2
240	女郎花	ヲミナヘシ（右傍）		遠・植物10ウ2
241	白頭公	ヲキナクサ（右傍）		遠・植物10ウ2
242	韋（平声）	キ（右注）	ヲシカワ（左注）	遠・雑物10ウ4
243	印（上声）	イン（右注）	ヲシテ（左注）	遠・雑物10ウ4
244	緒（上声）	シヨ（右注）	ヲ（左注）	遠・雑物10ウ4
245	羈（平声）	キ（右注）	ヲモツラ（左注）	遠・雑物10ウ4
246	勒（入声）	ロク（右注）	ヲモカヒ（左注）	遠・雑物10ウ4
247	綏（平声）	スイ（右注）	ヲヒカケ（左注）	遠・雑物10ウ5
248	柯（平声）	カ（右注）	ヲノヽエ（左注）	遠・雑物10ウ5
249	弩（上声）	ト（右注）	ヲホユミ（左注）	遠・雑物10ウ5
250	佩（去声）	ハイ（右注）	ヲモノ（左注）	遠・雑物10ウ5
251	帶（去声）	タイ（右注）	ヲヒ（左注）	遠・雑物10ウ5
252	紳（平声）	シム（右注）	同（左注）	遠・雑物10ウ6
253	筬（平声）	セイ（右注）	ヲサ（左注）	遠・雑物10ウ6
254	几	キ（右注）	ヲシマツキ（左注）	遠・雑物10ウ6
255	把	ハ（右注）	ヲホヒ（左注）	遠・雑物10ウ6
256	桶	トウ（右注）	ヲケ（左注）	遠・雑物10ウ6

3　鎌倉初期書写色葉字類抄の音注

〔知篇〕

鎌倉初期書写本は地儀に下位区分される熟字「馳道」で始まる。これより前に地儀相当の語群があったと推定される。二巻本世俗字類抄(8)を参看すると、当該の「馳道」に先んじて「地」「塵」がある。その後には「磐」「街」「陣廳」「逍邏」を配する。二巻本色葉字類抄になると語彙の増補が著しい。おそらく鎌倉初期書写本は、二巻本世俗字類抄に近い構成であったろう。さらに語彙数が少なかった可能性もある。また、「馳道」の割注に見える「天子所行之道也」については、二巻本世俗字類抄も同じく割注で掲載するが、仮名音注「チタウ」はない。二巻本色葉字類抄も同様である。鎌倉初期書写本が原初形態である原撰本系諸本の一つであるとすれば、それ以後の編纂になる二巻本世俗字類抄や二巻本色葉字類抄などの増補過程において、仮名音注「チタウ」を割愛したものか。あるいは、原初形態には存在せず、鎌倉初期書写までの間に付されたものか。

このように字音を表す仮名音注が果たして原初から存在していたのかどうか、その一部はあったのか、現存する零帖だけでは判別不能である。そこで手がかりとすべく、仮名音注に関わる部分について、二巻本世俗字類抄と対照させる。

	鎌倉初期書写本		二巻本世俗字類抄	
〔001〕	馳道	チタウ	仮名音注なし	
〔002〕	兒	コ	仮名音注なし	
〔003〕	嫡	チヤク	仮名音注なし（嫡子）	
〔004〕	父	仮名音注なし	仮名音注なし	
〔005〕	烏獲	仮名音注なし	仮名音注なし	
〔006〕	娜嬢	仮名音注なし	＊掲出字なし	
〔007〕	血	クヱツ	仮名音注なし	
〔008〕	脉	ハク	仮名音注なし	
〔009〕	乳	シユ（ニユ？）	仮名音注なし	
〔010〕	力	リヨク	＊掲出字なし	
〔011〕	痔	チ	チ	
〔012〕	妳房	仮名音注なし	仮名音注なし	
〔013〕	乳广＋付	チフ	チフ	
〔014〕	乳癰	同（チフ）	同（チフ）	
〔015〕	鴆	チム	＊掲出字なし	
〔016〕	鱐	ヨウ	仮名音注なし	
〔017〕	千鳥	仮名音注なし	仮名音注なし	
〔018〕	乳牛	仮名音注なし	仮名音注なし	
〔019〕	茅	ハウ	仮名音注なし	
〔020〕	苣	キヨ	仮名音注なし	
〔021〕	茶	チヤ	仮名音注なし	↓飲食
〔022〕	萵苣	仮名音注なし	仮名音注なし	
〔023〕	石髪	仮名音注なし	仮名音注なし	
〔024〕	篪	チ	＊掲出字なし	
〔025〕	徴	チ	＊掲出字なし	
〔026〕	碪	チム	＊掲出字なし	
〔027〕	怏（忱？）	チヒ（チン？）	＊掲出字なし	
〔028〕	筑	チク	チク	
〔029〕	注	チウ	＊掲出字なし	
〔030〕	註	チウ	＊掲出字なし	
〔031〕	軸	チク	＊掲出字なし	
〔032〕	褌	ヒツ	仮名音注なし	

〔033〕賃　チム　チン
〔034〕幗　コク　＊掲出字なし
〔035〕逆靼　仮名音注なし　仮名音注なし
〔036〕鍮石　チウシヤク　チウシヤク
〔037〕地子　チシ　仮名音注なし
〔038〕茶椀　チヤワン　仮名音注なし
〔039〕襷褌　仮名音注なし　仮名音注なし
〔040〕粽　ソウ　仮名音注なし
〔041〕糉　ソウ　仮名音注なし
〔042〕角黍　仮名音注なし　仮名音注なし
〔043〕千　仮名音注なし　仮名音注なし
〔044〕丈　仮名音注なし　仮名音注なし
〔045〕小　セウ　＊掲出字なし

一瞥して気づくことは、鎌倉初期書写本には多くの仮名音注が付載されていることである。二巻本世俗字類抄では仮名音注が少なく、四五例のうち五例を数えるに過ぎない。なお、これに続く詞字の五四例は省略したが、同じ傾向を示している。鎌倉初期書写本が原初形態を引き継ぐとすれば、原撰本系諸本においては仮名音注を豊富に付載していたことになる。しかし、字類抄諸本が「色葉和名」という基本的な編纂方針のもと成立した点を考慮すると、仮名音注の少ない二巻本世俗字類抄のような姿が古態ではないかと想像する。

これに関して、〔033〕は示唆的な例である。両者ともに仮名音注を付しており、原初形態からの存在を想定できる。さらに、二巻本世俗字類抄では地篇の人事にも「賃」を掲出し、音注「如云（如音）」を見出す。これは「音にしたがふ」と解釈できる音注表記と認められ、仮名音注を付載するよりも前に存在したのではないかと想定している。音注表記としては原撰本系諸本に存在していたのではないかと思われる。つまりは掲出字「賃」の字音を把握したいという判断が原初形態からあったと認められよう。

この他、〔011〕〔021〕〔028〕〔036〕も同じことが言える。鎌倉初期書写本の〔021〕は雑物に下位区分しているが、二巻本世俗字類抄では飲食に掲出字「茶」があり、仮名音注「チヤ」を付す。さらに、その仮名音注は左注にある。原則として単字の仮名音注は右注に付す。おそらく早くから移入し定着していた字音語であったため、和訓もなく、もとより字音であるとの意識が薄い語であったと認められる。

〔021〕茶　チャ　（知・植物02オ3）

なお、〔013〕は熟字の下字「广＋府」に対する「フ」が字音であるが、上字「乳」に対する「チ」は和訓である。別途に扱わなければならないだろう。〔014〕も保留。よって、五例が原撰本系諸本から引き継いだ仮名音注であろうと推定する。

省略した詞字に属する五四例についても、同様の分析をした。その結果、〔059〕〔062〕に相当する二巻本世俗字類抄では音注「如音」が、〔063〕には仮名音注「チョフ」が見出された。三例いずれも単字の場合である。熟字については相当する二巻本世俗字類抄において仮名音注が存在しなかった。

ここまでを踏まえて想定できることは、原初形態の字類抄諸本において字音を表記することは極めて少なく、仮名音注あるいは独自の音注「如音」などを用いていた可能性があるという点である。鎌倉初期書写本に多くの仮名音注が存在するのは、原初形態から引き継いだ数例を除いて、後の書写段階における付載ではないかという見通しである。

〔利・留篇〕

日本語の音節結合においては「第一音節にラ行音を配することはない」という特徴を指摘できる。よって、イロハ順の利篇・留篇に分類する語は全部が漢語である。

前章と同様に、二巻本世俗字類抄と対照した結果、利篇三十例のうち二例〔104〕〔105〕が原初形態から存する仮名音注ではないかと認められる。ただし、当該の二例は左傍に音注を配しており、熟字の場合、和訓・字音ともに右傍に付すという原則から外れている。次の〔106〕も含めて、存する一行目の右傍に余白が取れないための処置と判断できる。なお、〔104〕は「龍膽　リウタム［左傍］」の誤認。

〔104〕龍瞻　リムタウ［左傍］　（利・植物05オ1）
〔105〕林檎　リムコウ［左傍］　（利・植物05オ1）
〔106〕令法　リヤウホウ［左傍］　（利・植物05オ1）

興味深い例も指摘できる。詞字に属する〔111〕の場合、右注・左注ともに字音を付載する。いわゆる漢音と呉音の両形併存であるが、左注はサ変動詞になっており、より定着した語形を示している。観智院本類聚名義抄[9]を参看すると、同音字注「音冷　リヤウ［右傍］」とある。別途に和音を示してはいないが、やはり漢呉両形を想定している。

〔111〕領　レイ　リヤウス　（利・詞字05ウ2）
領　音冷　リヤウ［右傍］　（観智院本類聚名義抄／佛下本24－3）

次に、留篇の四例「瑠璃」「留守」「流浪」「流轉」を二巻本世俗字類抄と対照した結果、対応する仮名音注は見出せない。よって、鎌倉初期書写本には原初から存する仮名音注がないと認められる。

〔奴篇〕

奴篇は二六例を掲出する。二巻本世俗字類抄と対照した結果、対応する仮名音注は見出せない。やはり、鎌倉初期書写本には原初形態から存する仮名音注はないと認められる。なお、付随的な事象ながら、右傍に付すべき和訓を右注に付した例〔138〕がある。直前の〔137〕は原則どおりである。単なる誤認であるか。

〔137〕白滕木　ヌテノキ［右傍］　（奴・植物06ウ4）
〔138〕零陵子　ヌカコ　（奴・植物06ウ4）

〔遠篇〕

遠篇は九五例を数える。このうち単字に付された仮名音注は六一例、熟字のそれは一例である。単字の場合、ほとんど仮名音注を付載していると言って良い。ところが、二巻本世俗字類抄と対照した結果、対応する掲出字に仮名音注は見出せない。例数の少ない奴篇と状況が同じとは言い切れないが、やはり鎌倉初期書写本には原初形態から存する仮名音注はないと認められる。ただし、雑物の途中までしか存在しないため、遠篇の全体まではわからない。

4　掲出字の増補と音注

ここでさらに、見出し語としての掲出字数について、鎌倉初期書写本と二巻本世俗字類抄・二巻本色葉字類抄とを対照させて見た。次に掲げたごとく、鎌倉初期書写本遠篇の掲出字数は二巻本世俗字類抄よりも多い。つ

まりは、原撰本系諸本の方が増補系諸本よりも、その掲出字数において増えた様相を呈している。二巻本色葉字類抄との対比でも、人倫や人躰において鎌倉初期書写本の掲出字数が多いように見える。これについては、ァ行のオとワ行のヲとの相互混同という観点から分析する必要がある。鎌倉初期書写本には於篇部相当が存在しないので、直截的な対比はできないが、二巻本世俗字類抄の於篇を参照して、重複する掲出字を減じれば、矢印以下の例数となる。

これでも地儀・人倫・人躰が二巻本世俗字類抄より多いのは問題を残すが、動物・植物では二巻本世俗字類抄の掲出字数が多く、増補系諸本の段階を示していると言える。この結果から予想されることは、原撰本系諸本の一つである親本に、いずれかの書写段階で意図的な掲出字増補が図られた結果、現存の鎌倉初期書写本遠篇の姿となったという可能性である。その際、仮名音注も多く加えられ、字音把握に利便性を求めたと推定することができよう。

〔遠篇〕意義分類別の掲出字数

意義	鎌倉初	二世俗	二色葉
地儀	8 ↓ 7	4	15
人倫	34 ↓ 18	16	27
人躰	10 ↓ 4	なし	5
動物	14 ↓ 5	6	21
植物	14 ↓ 4	11	24
雑物	（15）	18	32

遠篇については右の結果を得たが、知篇〜留篇についてはどうか。同様の対照を掲げておく。なお、詞字は辞字・重點・畳字に分割され、一部は人事にも分離されて行く増補段階における経緯があるので、別途分析が必要である。よって、割愛した。また、知篇の地儀は途中からしか存在しないため、括弧に入れた。

〔知篇〕意義分類別の掲出字数

意義	鎌倉初	二世俗	二色葉
地儀	（1）	7	27
人倫	5	5	13
人躰	8	12	23
動物	4	6	9
植物	5	8	12
雑物	16	19	24
飲食	3	3	6
員數	3	5	7

〔利篇〕意義分類別の掲出字数

意義	鎌倉初	二世俗	二色葉
地儀	なし	1	2
人倫	1	1	2
人躰	なし	なし	1
動物	1	2	2
植物	4	4	4
雑物	1	4	4
飲食	なし	なし	なし
員數	1	1	2

〔奴篇〕意義分類別の掲出字数

意義	鎌倉初	二世俗	二色葉

地儀	1	2	3
人倫	4	3	7
人躰	なし	なし	4
動物	1	3	5
植物	2	5	12
雑物	3	9	13
飲食	1	1	2
員數	なし	なし	なし

〔留篇〕意義分類別の掲出字数

意義	鎌倉初	二世俗	二色葉
地儀	なし	なし	なし
人倫	なし	1	なし
人躰	なし	なし	1
動物	なし	なし	なし
植物	なし	なし	なし
雑物	1	4	6
飲食	なし	なし	なし
員數	なし	なし	なし

遠篇とは異なり、知篇から留篇までは鎌倉初期書写本の掲出字数が少なく、原初形態を示していると言える。二巻本世俗字類抄や二巻本色葉字類抄においては、見出し語たる掲出字の増加が図られており、増補系諸本の段階を知ることができる。これに対して、仮名音注の数が鎌倉初期書写本に相当多いのは、原撰本系諸本の原初状態ではなく、書写段階における書き入れ増補であろうこと、すでに第二章で推定したごとくである。よって、掲出字と仮名音注との分析から言えることは、鎌倉初期書写本はオリジナルという意味での原形本ではなく、それを含む原撰本系諸本の一つを引き継いだ蓋然性が高い。

5 おわりに

鎌倉初期書写色葉字類抄に付載された仮名音注について、分析結果を集約しておく。すなわち、見出し語たる掲出字の数量は原初形態である原撰本系諸本の状況を推定させるが、仮名音注は掲出字二五六例のうち九十例に付されており、書写段階において意図的な書き入れ増補を経たと認める。なお、朱声点による声調については、紙数の都合から割愛した。別の機会に譲る。

［注］

(1) 次の複製を参照した。
・原装影印版 古辞書叢刊「色葉字類抄：原形本鎌倉初期筆零帖」（雄松堂書店、一九七七年）

(2) 次の文献の316～322頁を参照した。
・川瀬一馬「増訂 古辞書の研究」（雄松堂出版、一九八六年）

(3) 現存する字類抄諸本（世俗字類抄や色葉字類抄などを包括した呼称）を示す。

【原形本】
［イ］川瀬一馬蔵本
▼鎌倉時代初期の書写になると推定する零本。原形本と認定できるかは不明。

【節用文字】
［ロ］お茶の水図書館蔵本（成簀堂文庫旧蔵）
▼二巻本色葉字類抄を平安時代末期か鎌倉時代初期に書写したともいわれる零本。

【二巻本世俗字類抄】
［ハ］天理図書館蔵本（松平定信旧蔵）
▼江戸時代中期以降の書写か。
［ニ］黒川家蔵本
▼元治元年晩夏中旬に黒川春村が書写。

［ホ］川瀬一馬蔵本
▼黒川家蔵本［ニ］の手写本。
［ヘ］東京大学文学部国語研究室蔵本
▼奥書のない黒川家旧蔵本であり、黒川家蔵本［ニ］とは別の一本。
【三巻本世俗字類抄】
［ト］水戸彰考館本
▼永正十二年の書写本。戦災で消失したという。これは、［ヘ］東京大学文学部国語研究室蔵二巻本の表裏に附箋があり、「文学博士橋本進吉云世俗字類抄三巻水戸彰考館ニアリ永正ノ寫本ニシテ順識トアリ」による。
【七巻本世俗字類抄】
［チ］尊経閣文庫蔵本
▼巻三を欠く六冊本。
【二巻本色葉字類抄】
［リ］尊経閣文庫蔵本
▼正和四年と応永三十年との二度に渡る伝写を経て、永禄八年に書写。
【三巻本色葉字類抄】
［ヌ］尊経閣文庫蔵本
▼院政期末あるいは鎌倉初期の書写ともいうが、確かではない。中巻と下巻の一部を欠く。欠落部分については黒川家蔵本の［ル］にて補う。
［ル］黒川家蔵本
▼江戸中期の書写か。

（4）字類抄諸本の基本的な編纂構造を次に示す。これは「漢家以レ音悟レ義、本朝就レ訓詳レ言、而文字且千訓解非レ一、今揚二色葉之字一為二詞条之初言一、凡四十七篇、分二為両巻一、篇中勒レ部、為令二見者不労一レ眸也。」（三巻本色葉字類抄、上巻1ウ2～5）という序、あるいは「已上部類同二伊字一」（同、上巻1オ7）と書かれた目録末尾に基づく。
「篇」→　伊・呂・波・仁・保・倍・登・知・利・奴・留・乎　…
「部」→　天象・地儀・植物・動物・人倫・人躰・人事・飲食　…
「類」→　歳時・居処居宅具・植物具・躰・鬼神類・病瘡類　…

（5）次の複製を参照した。
・尊経閣影印善本集成19「色葉字類抄二・二巻本」（八木書店、二〇〇〇年）

（6）次の文献における研究成果を参照した。
・東京大学国語研究室資料叢書13「倭名類聚抄京本・世俗字類抄二巻本」（汲古書院、一九八五年）所収の解題（峰岸明）
・尊経閣影印善本集成19「色葉字類抄二・二巻本」（八木書店、二〇〇〇年）所収の解説（峰岸明）
・二戸麻砂彦「二巻本世俗字類抄反切音注考」（山梨県立女子短期大学紀要34、二〇〇一年）
・二戸麻砂彦「字類抄諸本の改編と反切音注」（國學院雑誌一〇二巻第一一号、二〇〇一年）
・二戸麻砂彦「二巻本色葉字類抄の同音字注」（山梨県立大学紀要3、二〇〇七年）
・二戸麻砂彦「二巻本世俗字類抄の音注『如音』」（山梨県立大学紀要4、二〇〇八年）

（7）情報機器における日本語表示の規格としては、2004JIS（JIS X 0213: 2004）が策定され11223文字が規定されているが、これで表示できない漢字は当然存在する。いわゆるJIS外漢字表示方法については、以下の論文に准拠した。部首や諧声符など、漢字の字形パーツを＋記号を使って組み合わせる方法である。当該の漢字には傍線を付してある。
・二戸麻砂彦「パソコンにおける漢字処理／試論」（山梨県立女子短期大学紀要28、九～一八頁、一九九五年）

（8）次の複製を参照した。
・東京大学国語研究室資料叢書13「倭名類聚抄京本・世俗字類抄二巻本」（汲古書院、一九八五年）
・三宅ちぐさ「天理大学付属図書館蔵　世俗字類抄　影印ならびに研究・索引」（翰林書房、一九九八年）

（9）次の複製を参照した。
・正宗敦夫編「類聚名義抄第一・二巻」（風間書房、一九七五年）
・天理図書館善本叢書「類聚名義抄観智院本」（和書之部32～34、八木書店、一九七七年）
・宮内庁書陵部蔵「図書寮本類聚名義抄」本文編・解説索引編（勉誠社、一九七六年）

（平成21年11月25日）